Bulletin 2016 9

COLONNADE

特集1●第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

ここにあるタカラもの―建築まちづくりの七転び八起き― 2
プログラム報告 3
地域に根ざす建築作品・活動 カタログ2016 5
空き家空き地コンペ 6

特集2●支部長活動方針

2016年度 活動方針 8
藤沼 傑 山下設計

特集3●支部総会報告

2016年度 関東甲信越支部総会の報告 9
榎本雅夫 榎本建築設計事務所

FORUM

海外レポート

フィンランド・スウェーデンの愛されている自然と建築たち 10
高安重一 日本大学／アーキテクチャー・ラボ

覗いてみました他人の流儀

池田 修氏に聞く アーティストが街に1人住めば… 12
池田 修 BankART1929

温故知新

見る、描く、考える 旅で学ぶということ 14
香山壽夫 香山壽夫建築研究所

学生卒業設計展

2015年度大学院修士設計展の報告 15
佐藤光彦 日本大学／佐藤光彦建築設計事務所

委員会活動報告

〈アーバントリップ実行委員会〉
第80回アーバントリップ見学会に参加して 16
尾形光男 日本設計
第81回「新緑の軽井沢へ」変わる軽井沢、変わらない軽井沢 17
西川直子 建築ジャーナル
〈総務委員会〉会員相談室 18
〈交流委員会〉交流委員会Aグループ見学会報告 19
香川幸仁 日本ヒューム

地域会だより

〈山梨地域会〉山梨地域会の活動 見学会と講演会 20
渡辺安徳 アースワーク環境計画事務所
〈長野地域会〉長野地域会活動報告 21
山口康憲 アーバー建築事務所

日本版CABEを考える

目黒区景観計画に基づく「景観アドバイザー会議」の報告 22
棚橋廣夫 エーディーネットワーク建築研究所

BACKYARD

JIA建築家大会2016大阪 開催のお知らせ 23

JIA
公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
vol. 265

報告

第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

大会テーマ

ここにあるタカラもの
—建築まちづくりの七転び八起き—

関東甲信越支部大会 2016前橋高崎

会期：2016年6月10日㈮、11日㈯、12日㈰　開催地：群馬県前橋市、高崎市

成功裏に終わった第1回支部大会は、JIAのタカラものになることを実感

支部大会実行委員長　上浪 寛

2016年6月10日㈮～12日㈰の3日間、第1回支部大会を群馬で無事開催することができ、内外から好評価を得ることができました。多くの会員からの参加や支援協力のたまものです。この場を借りて会員の皆様に感謝申し上げます。またこの大会の成功は群馬地域会はじめ支部23地域会のご支援によるところが大きく、地域会で活動されている会員の皆様には特に深く感謝申し上げます。

期間中は会員、非会員合わせて延べ1,000人以上の参加者を迎えることができ、特に最終日の群馬音楽センターでは700名前後の参加者となり大変盛況な大会となりました。大会の3ヵ月前からは「空き家空き地コンペ」「建築家カタログ」といった一般公募を行いました。これらを進める過程で地域に根付いた専門家が地元自治体、市民、行政と連携し成果を上げた結果、地方都市開催の支部大会として成功したと考えています。

2015年まで保存問題をテーマに、24回にわたり保存大会を開催してきました。地域会の協力を得ながら支部としてもまとまりを持ち、社会と向き合おうとしてきた成果と言えます。保存大会を昇華させた今回の支部大会は、「保存」に加えて「環境」「災害」「まちづくり」「国際」をテーマに、各委員会の連携とその知見を地域で共有すること、そして地域の課題について10都県を通した広い視野で解決方法を考えることが、開催地域社会並びに地域会の活動に貢献できると考えました。大会終了後、群馬県他地元行政や自治体はじめ地元市民とは具体的に連携した活動に繋がりつつあります。

第1回支部大会は群馬地域会の惜しみない活動の成果と言えますが、これは他の地域会にも応用できると考えます。各委員会活動は委員会相互の連携を取り合うことで、JIAらしい活動成果を得られます。多角的な視点からの問題把握・解決を可能とし、必然的に社会的な成果を得られます。支部大会の準備・開催を通して普段の各委員会活動にも反映していければ、これらのコンテンツはJIAのタカラものになると実感した大会でした。

ホスト地域会として、この大会が持つ意味、価値、もたらすもの

群馬地域会 代表　飯井雅裕

1年以上の準備期間をかけた第1回関東甲信越支部大会が無事終了した。開催地である前橋と高崎の2都市の特徴を出しながら、3日間で15のプログラムを実行した。ホスト地域会として「もてなしの心」で参加者を迎えると同時に、地域にとって意義のあるものにすることを重要視した。

そのひとつが地域を外から見て評価してもらうこと、つまり地域の「タカラ」と「課題」を提示する中で、今まで地域内では気付かなかった魅力や解決方法を引き出してもらうことである。このことは「メインシンポジウム」や「空き家空き地コンペ」など各プログラムの過程やディスカッションの中で随所に見られた。今後さらに情報交換する中でこの成果が高められると思う。

もう一つの成果として、行政や市民と建築家の関係が深まったことが挙げられる。開催にあたり行政の協力を得ると同時に、パネラーとしても登壇いただき、一緒に考えていく体制を模索することができた。また地元大学の先生や音楽や映画界などの異なるジャンルで活躍する方々の登壇や協力も、建築家に期待される役割を明らかにする意味で大切な交流となった。さらに多くの市民に来場いただいたことは建築家やJIAの存在のPRに繋がったと感じている。

内藤廣氏の言葉の中にあった「地域の力」と「地方の風が吹く」時代の到来に期待を寄せ、その実現のために地域の「タカラ」である文化と風土をより深く理解し、大切にしながら地域の建築家としてアイデアを出していくことが必要であると感じた。今回の大会で得た考えや活動をぜひこれからも実践していきたい。

最後に上浪支部長をはじめ、支部大会実行委員会の皆さまとご協力いただいた関係者の皆様に感謝を申し上げ、報告とさせていただきます。

第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

プログラム報告

メインプログラム「地域のタカラを世界に繋ぐ／地域文化と建築」

6月12日㈰　13：30～16：50　会場：群馬音楽センター

今こそ、地域文化（地域のタカラもの）を見つめ直し、これからの建築のあり方を探る時であるとして、日本を代表する建築家・内藤廣氏に講演いただいた。そして活躍著しい若手建築家・藤村龍至氏に空き家空き地コンペ講評をいただき、続く鼎談では、地元市民の山田由紀子氏（オペラ歌手）を交えて市民目線で楽しい建築家とのトークも実現した。 また、会場は音楽文化の発展と共に歩んできた群馬音楽センターであり、「群馬交響楽団弦楽四重奏団」「東京農業大学第二高等学校吹奏楽部」の演奏を華やかに盛り込んだ。チラシの配布・折り込み、新聞や各種広報誌への掲載、ラジオ出演などのさまざまな広報活動により多くの市民の来場を得られ、良い話が聞けたことや建築家に対する評価をいただくことができたのは、成功と言って良いと捉えている。講演、鼎談、音楽演奏、表彰式、フェロー会員の紹介など盛り沢山だったが、入念な事前打合せ、リハーサルを行いスムーズな進行ができた。

支部大会を多くの市民と共に、群馬音楽センターの空間を充分に活かして締めくくることができた。

（飯井雅裕）

23地域会発表会「ここにあるタカラもの」

6月10日㈮　14：30～18：00　会場：前橋プラザ元気21　にぎわいホール

昨年度の第24回保存問題東京大会14地域会発表会を発展させたもので、関東甲信越支部23地域会のうち18地域会が一堂に会し、各地域会から資料を配布し、発表を行い、会員・市民なども参加して意見を交換した。太平洋側から日本海側まで多様な地域性がある支部、地勢・風土・歴史・経済・文化などでの多種多様な特性を相互理解する上で、大変有意義なものとなった。100名近い参加のもと、今後地域会同士の連携活動をしていこうとの提案もあり、白熱した議論とともに大いに盛り上がり、予定終了時間を1時間も過ぎて閉会となった。

これからの支部・地域会活動においても、大きな布石となったのではないだろうか。　（安達文宏）

メインシンポジウム1「歴史の中のタカラもの」

6月11日㈯　9：30～12：10　会場：前橋プラザ元気21　にぎわいホール

群馬の「タカラもの」を醸成した歴史・地勢・民俗・産業と、その建築的魅力・価値について、「近代群馬の地域構造」、「群馬の風土と建築」と題し、2人の専門家から解説いただいた。後半は、地元メディアの編集委員と群馬地域会の建築家が加わり、「タカラもの」の活用と継承・これからの建築・まちづくりをテーマにディスカッションを行った。

登壇者：丑木幸男、村田敬一　パネルディスカッション：丑木幸男、村田敬一、古澤良文、須田睿一

コーディネーター：加藤誠洋　（長井淳一）

メインシンポジウム2「街づくりの中のタカラもの」

6月11日㈯　14：30～17：30　会場：高崎シティギャラリー　コアホール

空き家空き地対策をテーマにしたシンポジウムで、JIAの建築家からは環境、災害、保存、まちづくりの視点で事例紹介を行い、多様な視点の大切さを浮き彫りにした。前橋市と高崎市の現状報告では、さまざまな助成制度を設けていることが説明された。コメンテーターからは、「オーナー自身が空き家空き地に興味を持っていないことが問題である」「縮小社会における建築設計や都市計画の在り方を問い直すべき」などの切り口が紹介された。ディスカッションでは、検討のための助成制度も必要であり、また、良質な建築・美しいまちづくりのための日本版CABEのような仕組みも必要であるなどの意見が交わされた。そして、行政とJIAとの信頼関係、建築家と他専門家とのコラボレーションが大切であると結んだ。（連　健夫）

「群馬音楽センター　展示」

6月12日㈰　10：00～19：00　会場：群馬音楽センター　1、2階ロビー

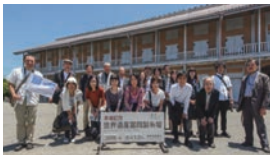
メインプログラム会場である群馬音楽センターの開放的なホワイエ空間に、北関東甲信越学生課題設計コンクール受賞作品、空き家空き地コンペ応募作品、地域に根ざす建築作品・活動カタログ2016入選作品、協賛企業展示ブース、学生企画パネル展示「ここにある学び」、前橋工科大学学生制作ダンボール椅子展示を実施した。多くの来場者に見ていただき、JIA、建築を存分にアピールすることができた。　（神澤宣次）

第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

「富岡製糸場見学バスツアー」

6月10日㈮　9：00～14：00　コース：高崎駅―富岡製糸場―前橋

一般見学コースにもある建築群では、ボランティアガイドの方から建物の特徴や工法、当時の女工さんの様子を交えた解説があり、建物や設備だけではなく労働環境も先進的な模範工場であったことが印象に残った。その後、特別に公開されている西置繭所、東置繭所2階、鉄水溜について、市富岡製糸場保全課の森田係長に解説をいただいた。素屋根が掛かり、瓦の降ろされた西置繭所では、保存修理の様子や課題などについてもうかがった。（永井福二）



「前橋まち歩き／臨江閣見学コース」

6月10日㈮　17：00～18：30　見学地：前橋市街地・臨江閣

前橋中心市街地を散策後、保存改修工事の進む県・市指定重要文化財「臨江閣」別館を見学。全体行程が非常にタイトであり、前橋中心市街地の現状、また全体に仮設覆い屋を掛けての「臨江閣」別館改修工事について充分な説明を行うことは叶わなかったが、概要はご理解いただけたと考えている。移動行程、見学先のノスタルジックさが、初夏の夕刻と相まって懐かしさと切なさを感じる企画であった。（上原和彦）

「高崎まち歩き／高崎市美術館・旧井上房一郎邸」

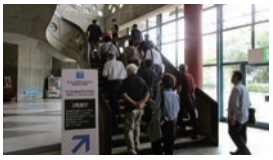
6月12日㈰　9：30～12：00　見学地：高崎市美術館・旧井上房一郎邸

美術館のご好意で、支部大会参加者は入館料無料、開館時間より30分早く入館可能にしていただいた。JIA群馬地域会制作の、「井上房一郎＋タウト＆レーモンド　年譜」を展示し、必要に応じて美術館の担当者、館長、JIAメンバーによる解説を行った。この年譜は、3人の関係を理解できると好評だった。（水上勝之）

「群馬音楽センター　バックステージツアー」

6月12日㈰　10：00～12：00　会場：群馬音楽センター

ギャラリーから始まり、映写室、会議室、楽屋、舞台袖、奈落の順に見学した。滅多に見ることのできないバックステージ見学に参加者は興味津々。オリジナルの家具や照明が当時のまま使われている様子や、当時がイメージできる楽屋の雰囲気に多くの見学者が感激していた。（松本金弥）



「支部会議」

6月10日㈮　13：00～14：25　会場：前橋プラザ元気21　にぎわいホール

支部5つの委員会（まちづくり（都市・建築）、保存問題、災害対策、国際事業、環境）の最新活動をプレゼンテーションし、会員・参加者へのアピールを行った。つづいて5委員会共同企画の「地域に根ざす建築作品・活動カタログ2016」入選71作品を紹介し、受賞29作品の表彰を行った。（長井淳一）

「フェロー会員会議」

6月10日㈮　13：00～14：30　会場：前橋プラザ元気21　505号室

各フェローから自己紹介と共に、①JIAに入って良かったこと、②これからのJIAについて、話していただいた。①として、「仲間ができた。多くの先輩と話ができた。地域との繋がりができた」などが挙げられ、②では、「厳しい現状認識・理念・仕組みの提案・建築家職能・会員・会員間の協働」などの指摘について、意見交換がされた。（連　健夫）

「開会セレモニーと映画「ここに泉あり」上映会」

6月11日㈯　18：00～21：00　会場：高崎電気館

芦原太郎会長（当時）による乾杯挨拶の後、映画の解説と電気館の紹介を高崎電気館 運営責任者である志尾睦子氏にいただいた。群馬音楽センターの建設に繋がる群馬交響楽団の草創期の映画を見ることで、街を理解し、翌日のメインプログラムへと繋げることができた。上映後、映画に対して拍手が起きたことはありがたかったし、イタリアン軽食とドリンク付きも好評であった。（飯井雅裕）

「ウェルカムパーティー」

6月10日㈮　19：00～20：40　会場：群馬県庁32階展望ホール

支部大会初日の夜、群馬県一の高さの会場でのパーティーに88名の参加があった。夕暮れどきの上州の山々や関東平野の景色を眺めながら、支部大会ロゴ作成者の表彰、フェロー会員の紹介も行い、前橋の夜を地産食材や名産と共に楽しんだ。一般貸出をしないホールを県にご協力いただき、また備品、飲食は群馬地域会員の皆さんに尽力いただいて、華やかなおもてなしの場を設けることができた。（曾田　彰）

第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

地域に根ざす建築作品・活動 カタログ2016

http://www.jia-kanto.org/shibu-taikai/2016/catalog/index.html

関東甲信越支部9県1都の設計者や活動グループにスポットライトをあて、支部地域内の建築作品や地域活動を紹介する最新情報カタログ企画。「持続可能な建築や社会への提案」を共通テーマとし、「まちづくり(都市＋建築)」「保存問題」「災害対策」「国際事業」「環境」の5委員会が共同でプログラム作りをした。

応募代表者がA3判の定形書式上に自らの設計や活動を紹介。掲載された78点の内訳は、入選71点、参考作品2点、委員会活動報告5点。詳細は当該HP内の「企画から展示・HP公開までの流れとまとめ」に記されている。

受賞作品については審査委員講評も掲載されており、大会に参加できなかった会員にも各自でアクセスして見てもらうことができる点、一過性に終わらない行事として意義の感じられる内容となった。　(環境委員会委員長　寺尾信子)

●入賞作品

建築作品部門

■根羽村高齢者福祉施設
ねばねの里「なごみ」～「根羽杉」で環境立村を目指して～
(松下重雄)
大会特別賞

■千葉県流山市
秋元邸・秋元酒店
(高階澄人)
地域特別賞

■埼玉県本庄市
本庄・宮本 蔵の街
(戸谷正夫)
地域特別賞
まちづくり委員会賞

■マチの記憶の継承
江ノ電プラットホームの記憶を思い起こさせるガーデンカフェ
(中山信二)
地域特別賞

■山梨大学 赤レンガ館
(長田孝三)
地域特別賞

■荻窪家族レジデンス
「地域開放型シェアハウス的多世代賃貸住宅」
(連　健夫)
大会奨励賞

■千葉県・市原市
140年に渡り住み継がれる家
変えたもの／変えないもの／復活させたもの
(郡山貞子)
大会奨励賞

■櫻介護村計画　1棟目
無確認建築物のコンバージョン
(吉田　晃)
大会奨励賞

■「エアコン」ではなく「ラディコン」身近な技術を用いて理想の放射環境を創る東京都E邸
(寺尾信子)
大会奨励賞

■もりのいえ
－Shelltering Earth－
(遠野未来)
大会奨励賞

■山梨県早川町
早川町役場新庁舎
(長井隆志)
大会奨励賞

■■埼玉県越谷市
ことのは越ヶ谷～蔵のある街づくりプロジェクト～
(広川　昇)
保存問題委員会賞

■東京都豊島区　立教大学本館(1号館／モリス館)
(古賀　大)
保存問題委員会賞

■長野県下伊那郡中川村
南駒ヶ岳を望む家(田舎に住む。愛知県知立市よりの移住)
(新井　優)
環境委員会賞

活動部門

■新潟まち遺産の会
(大倉　宏)
大会特別賞

■浦安旧漁村の住文化の継承
(田中大朗)
地域特別賞
災害対策委員会賞

■ふじさわこどもまちづくり会議
(三原栄一)
地域特別賞
まちづくり委員会賞

■吉田村プロジェクト
(永峰麻衣子)
地域特別賞

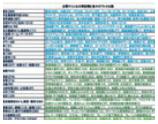
■特活)景観建築研究機構
景観・歴史的建造物の保存整備と活用
(羽鳥　悟)
地域特別賞

■地方都市の記憶の継承
―建築物が紡ぐ歴史と文化―
(平澤宙之)
地域特別賞

■ぐんま木塾
100年杉プロジェクト
(長井淳一)
地域特別賞

■JIA杉並 土曜学校
(林　美樹)
大会奨励賞

■建築・災害などのテレビ番組のデジタル保存・データベース化
(河西良幸)
災害対策委員会賞



■「高崎マーチングフェスティバル」―街のあらゆる空間を音楽ステージに―
(飯井雅裕)
国際事業委員会賞

■地域資源発見活動としての群馬連続建築ツアー
(臼井敬太郎)
国際事業委員会賞

■土に学べ　版築シェルターの制作　前橋工科大学建築学科　建築設計ワークショップの試み since 2012
(石川恒夫)
環境委員会賞

■低炭素型社会の推進　■まちづくり　■建築保存　■災害対策

第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

空き家空き地コンペ

「物件オーナーや住民の皆さんが、本気になるような提案募集」

コンペ概要

このコンペは、前橋市の中心街に接するエリアにおいて、空き家、空き地をターゲットにエリア全体のバリューアップをする提案コンペです。現在、空き家、空き地対策はどこの自治体でも大きな課題となっており、また事業性を含む、実施に繋がる可能性、設計条件は常に付加されWEBで入手する、という今までにないチャレンジングな内容を持ち、3月と4月の2回の説明会では合計140人を超える参加者となりました。

難しい内容であるにもかかわらず32の応募がありました。5月15日の公開一次審査会では判断基準を含め審査員の中で議論になり、結果9の案が選ばれました。支部大会の3日目、エリアに位置する前橋市本町二丁目公民館でのプレゼンテーションと公開最終審査会は行政や地元地権者も注視する中で行われ、9案はいずれも質が高く審査は伯仲するも公正に受賞案が選定されました。群馬音楽センターで授賞式、藤村龍至審査員長の講評が行われました。このコンペは大会テーマ「ここにあるタカラもの」の趣旨を反映させたコンペであり、今後の縮小社会における建築まちづくりの在り方を示唆しています。これらの案は今後の実施の可能性をさぐるべく審査メンバーやJIA群馬地域会が動き出しています。

（学術部会長　連 健夫）

●コンペが引き寄せたもの

このコンペは次の3点が特徴的であった。エリアを対象としたこと、住宅や商店・オフィス等さまざま混在していること、地域の拠り所の神社があることである。人は祭礼に集まり、市が立ち、経済・流通が発展し町となる。コンペにも多くの若者が熱気を持って集まった。行政は提案への期待、大学は共有する課題、住民はそれぞれの興味でコンペは迎えられた。これからが地域の専門家としての真価が問われる。一歩ずつ誠実に向き合うことが大切だ。

（学術部会・空き家空き地コンペWG群馬主査　長井淳一）

●空き家空き地コンペ　審査までのスケジュール

3月初旬	募集開始	
3月27日㈰	第1回現地説明会	前橋市本町二丁目公民館にて　参加者：69名
4月24日㈰	第2回現地説明会	前橋市本町二丁目公民館にて　参加者：61名
4月30日㈯	登録締切	
5月12日㈭	応募締切	
5月15日㈰	公開一次審査	応募32案の中から9案を選出 会場：JIA館1階 建築家クラブ
6月12日㈰	公開二次審査	9案のプレゼンテーションと最終審査会 会場：前橋市本町二丁目公民館
同日	表彰式	授賞式と審査員長の講評 会場：群馬音楽センター・高崎

●審査員　藤村龍至（審査員長）、上浪寛、連健夫、林昭男、小林光義、宮崎晃吉

空き家空き地コンペWG：　連健夫、宮崎晃吉、長井淳一、小林光義、伊藤昭博

公開一次審査の様子

公開二次審査の様子

●「空き家空き地コンペ」の審査を終えて

「コンペだとここまで引き出せるんだな」というのが正直な感想です。3ヵ月という応募期間を設け、期間中に説明会を2回ほど繰り返したことで応募者の提案の深度も、地域の理解も深まりました。応募案の提出時に不足の感じられたポイントも、最終審査では敷地の分析、事業採算シミュレーション、段階的な介入の手順の説明などしっかり補強され、どれも聴き応えがありました。20代の提案は勢いがあり、30代の提案は実務の経験が反映されて新しさと同時に説得力が備わっていました。

最優秀となった3人組は30代。長岡造形大出身の同級生で東京、新潟、群馬で働いており、同級生の結婚式で再会、意気投合してコンペに取り組んだといいます。緻密な計画と洗練されたプレゼンテーションに加え、「これがやりたい！」というエネルギーがあふれていて素晴らしいものでした。

今回はJIA群馬地域会の皆さんがハブになって行政と地元を繋いで下さいました。JIAや大学など既存の組織を上手く活かすことで地元と馴染みながら専門家のネットワークを活かすことに大きな意味があると感じました。「エリア特化型のストック再生事業」という課題には建築専門家組織の活かしかたのひとつとして大きな可能性があり、教育効果も高いと感じた次第です。

（審査員長　藤村龍至）

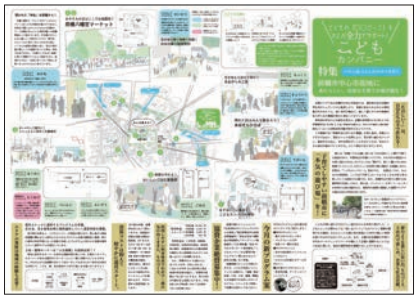
第1回JIA関東甲信越支部大会「建築祭2016群馬」

●一次審査を通過した9作品を紹介

最優秀賞

こどもの「○○ごっこ」を全力でサポート！こどもカンパニー

武井奈津美・小畑智之・井村晋作



受賞者のコメント

三角エリアでこどもたちが走り回り、親、その親たちの三世代の笑顔が見える。ご近所のみなさまも、つられて外へ。「こどもカンパニー」がプレゼントしたい、少し先の未来です。こどもの遊びは、こどもだけでなく大人も本気にさせます。そのような姿は、こども達にどう映るのでしょうか。前橋八幡宮でお参りをされる方々、現地説明会でお話しされる自治会の方々の姿は、私達を本気にさせました。授賞のきっかけをくださったみなさまに、感謝を申し上げます。そして、改めて、始まりだと感じております。

講評●少子化が叫ばれる中このエリアだからこそ可能となるコンセプトをわかりやすく提示し、地域企業の協賛という手法で空き家空き地のストック活用のしくみを提案されている。事業性にも信憑性を持て、子供と大人・地域と企業の関わりを持った具体的なコンテンツにも魅力を感じられたことが高く評価された。

優秀賞

前橋 OSUSO PROJECT
ー『おすそわけ』で繋がる人と地域の輪ー

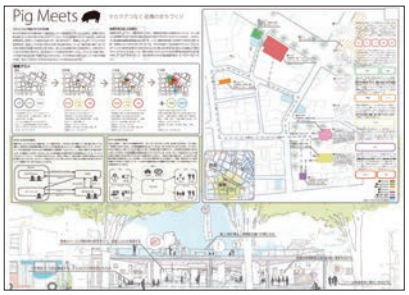
㈱三越伊勢丹プロパティ・デザイン
伊藤寛人　中道明日香

講評●前橋の問題を客観的に抽出し、その解決のカギは『人＝タカラ』であるというコンセプトを持ちテーマにあるおすそわけを組合という組織で展開していくという仕組みを整え、段階的に発展させていく過程の中で様々な『人』を軸にしたストック活用につながっていく…そのストーリー性が評価された。

学生賞

Pig Meets
タカラでつなぐ前橋のまちづくり

前橋工科大学建築学科　水谷俊貴

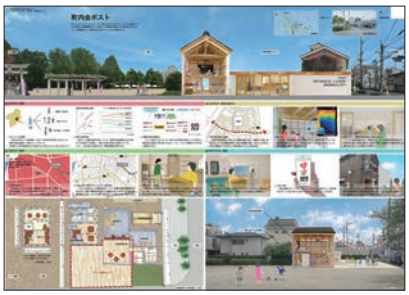


講評●前橋の特色である「豚」を核にしたコンテンツの提案や採算シミュレーションなど事業イメージがわかりやすかった。特に関連企業にこの事業のヒヤリングを行い中長期にわたる事業計画とストック活用展開を時系で整え提案した点は高く評価された。学生にとってとてもいい経験になったことと思われる。

地域会奨励賞

町内会ポスト

千葉大学　幕田早紀



講評●都市構造と家族体系・町内会の今と未来、そこに高度にシステム化された宅配の一部機能を担うという要素を加えた『町内会ポスト』というストック活用提案になっている。日常の中にスッと溶け込むかのような状況がイメージできるしくみとコンテンツが詳細な事業計画の裏付けの上に成り立っていた点が高く評価された。

佳作（5作品）

パラレルキャリアで支え合いのまち　ホンマチスクールがつくる、支え合いの経済圏／㈱ハル建築研究所　堀田浩平
三角州プロジェクト／㈱石井設計　代表者：藤原芳博　メンバー：竹内躍人、木暮勇斗、片貝功基、吉田祐介、斎藤翔
タカラノミカタ／㈱MON architects　水間寿明
次世代へつなぐ町の復興計画／秋山照夫建築設計事務所　秋山照夫
市庭（いちば）を拓く／日本大学短期大学部　建築・生活デザイン学科　高田康史

支部大会実行委員会：上浪寛（実行委員長）、慶野正司（副委員長）、藤沼傑（副委員長）、高階澄人、津下庄一
学術部会：連健夫（部会長）、安達文宏、寺尾信子、長井淳一、中山信二
運営部会：飯井雅裕（部会長）、曾田彰、鳥嶋吉浩、藤沼傑
財務部会：左知子（部会長）、慶野正司、渡邊顕彦
広報部会：鈴木利美（部会長）、高橋隆博、立石博巳
群馬地域会：相場昭伸、飯井雅裕（2016代表）、家住美路、石川純男、石川恒夫、伊藤昭博、上原和彦、岡田敦志、荻原正人、片山康浩、上村千秋、唐澤勉、神澤宣次、久保田和人、小林光義、齋藤慎佳、荘司由利恵、須田睿一、曾田彰（2015代表）、長井淳一、永井福二、萩原渉、羽鳥悟、林修司、松村和雄、松本金弥、丸橋森雄、水上勝之、山内彰、横堀将之、米田雅夫

支部長活動方針

2016年度 活動方針

関東甲信越支部
支部長
藤沼　傑

6月の総会にて支部長を拝命いたしました。世のため、人のために活動する公益のボランティア団体の支部長としては、まずは皆様の多様な活動を支援するということを基本とします。支部全体としては実に多様な活動を展開していますが、それぞれの活動をご担当されている方、各委員会、各地域会がボランティアとしてのぎりぎりの時間の中で成立していると実感しています。従って、組織を維持するための作業や時間はできる限り簡素化し、皆様の本来の公益活動時間をあまり邪魔しないように、支部運営を心がけます。

5月の支部総会で既に2016年度の支部活動方針を示しています。その基本は「会員そして社会に信頼されるJIAとして、継続性・持続性を重視した活動を展開する」であり、従来通りの5方針としていますが、今年度は以下の順番としています。

- 社会に発信するJIA
- JIA会員へのサービスを向上させる
- 支部と地域会を中心とした活動の推進と連携
- 対外的な活動の推進
- 公益社団法人としてのガバナンスを確実にする

まずは何を社会に発信していくかですが、建築三会の中でJIAの特徴は、良質で美しい空間を考えることが目的であって、建てることが最終目的ではないということです。最大許容容積で建替えることが昨今の街づくりとなっており、特に首都圏ではこの傾向が強く出ています。超高層が林立していく都市に対して、違和感というより危機感を感じています。このような街づくりに対して、防災、環境、景観などの総合的な観点から、本来の豊かな生活とは何かを社会に発信していくのがJIAの大きな使命です。会員の皆様のこのような本質的な社会に対しての発信を、支部としてできる限り支援していきたいと思います。

他方、社会は建築家に対して、非常に厳しい目で見ています。効率化や公正という意識が肥大化しており、何事にも厳正な原因、対処と結果を求める風潮は、空間という曖昧な概念で未来を扱うことを専門としている建築家を苦しめています。それには、JIA会員の情報交流を促進することで専門知識を深めることが第一です。昨年から始まったフェロー会員と正会員との交流の場を増やしていければと思います。また、個人では難しくても、団体としてリスク回避ができる各種サービスの検討を始めていきます。具体的には保険制度の改善やトラブル事例の情報共有などを考えています。

関東甲信越支部は県域と東京都内とでは状況がかなり異なると認識しています。今年開催した第1回支部大会は群馬地域会の皆様が大変な労力を費やしましたが、地域会の活性化に貢献したと実感しました。県域は従来の活動を継続しながら、このような支部大会による効果が発揮できる状況があります。今後支部大会をどのような形で継続していくのが良いのか、皆様から活発な議論を期待しています。

他方、東京都内は地域会の参加率が低いことや、行政の組織と地域会の組織とが一致していないなどの課題があり、今後何らかの整理が必要です。オリンピック後の東京の街づくりをどうするのか、しっかり議論し、社会に発信できる母体がJIAに必要でしょう。本年はこの東京都内のJIA活動のありようを検討していく予定です。

JIAの活動を正しく社会に伝えるためには、他団体との連携が必須となります。各地域で三会の連携をさらに深めていきたいと思います。建築士法が改正されましたが、告示15号による適正な設計料の設定についての認識はまだまだできていません。ましてや、告示15号に示されている、設計の標準業務や標準外業務の概念等は、今後継続的に社会に丁寧に説明していく必要があります。他団体との連携は災害時の重要な備えともなります。熊本地震の支援はまだまだ継続していますが、その最新の教訓をどのように支部内に広め、災害に備えるかも今年の課題であり、活動方針です。

最後になりましたが、JIAを支援していただいている協力会員の皆様との交流を大事にし、フレンズカップなどの各種懇親会にも、できる限り正会員の皆様をお誘いして参加していく所存です。

支部総会報告

2016年度
関東甲信越支部総会の報告

総務委員長
榎本雅夫

5月17日に開催された通常総会の概要をご報告します。

開会に先立ち、出席正会員63名・委任状出席者517名、合計出席数580名。支部規約第9条3により正会員数1,882名の10分の1以上であることから本総会が成立する旨、浅尾事務局長より報告された。

■議長団および議事録署名人の選出

上浪支部長のご挨拶後、議長に連(むらじ)健夫幹事長、副議長に渡邉顕彦副幹事長、議事録署名人に上垣内(うえがいと)伸一会員、左(ひだりと)知子(もこ)会員の2名が指名され、議事が開始された。

■第1号議案　2015年度事業報告承認の件

進藤憲治副幹事長より、2015年度総会における議案承認の件、役員会関連、各委員会・部会・地域会の活動報告があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第2号議案　2015年度収支決算承認の件

2号から5号議案については、浅尾事務局長より説明があった。赤字額が予算と比して縮小された理由として、地域活動費の削減、人件費の本部支部の業務割合の見直し、『Bulletin』発行費等の見直し、その他事業費の支出が少なかったことが報告された。松原忠策監査役による監査報告の後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第3号議案　支部規約改正の件

第7条2に支部顧問および相談役の決定方法と任期を定める件、第9条4に総会副議長を定める件、同条11に議事録の取り扱いを定める件について説明があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第4号議案　支部役員選出規約改正の件

支部規約と支部役員選出規約との不整合箇所の修正、および支部役員選出規約の改廃を支部総会の決議によることを追加する件について説明があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■第5号議案　役員及び監査選任の件

幹事16名監査1名を選任する件について説明があり、その後採決を行い、賛成多数で承認された。

■報告事項1　2016年度活動方針・計画

藤沼副支部長より、昨年度の活動方針を踏襲することを基本とした上で、以下に重点を置いた説明があった。

- 経済優先の情勢下においても美しさを追求する。「美しい」という言葉を新たに付け加え、「美しい日本の建築・まちづくり再建への社会的活動」を展開する
- 業務リスクを低減するための各種方策を検討する
- 若手とシニアとの交流、若手育成を大きなミッションとする

連会員より、活動に際しての具体的な仕組みづくりの必要性について発言があり、これに対し藤沼副支部長から、まずは現在ある20委員会、12部会、23地域会の多様な活動を支援し、若い世代に繋げていくことが重要との見解が示された。

■報告事項2　2016年度収支予算

藤沼副支部長より、以下の説明があった。

- 会員減少に伴い、2015年度比約6%の収入減を見込んだ現実的な予算を立てている
- 支出に関しては、できるだけ今まで通りの活動が維持できることを原則とした上で、当期収支差額をできるだけ±0に近づけたい
- 社会に発信するためにも広報活動を強化したい
- Web会議の活用等により旅費交通費の削減を図る
- 会員増による収入増を目指す

議長より、以上をもって総会の議案がすべて終了した旨の発言があり、支部総会が閉会となった。

総会終了後、第1回支部大会「建築祭2016群馬」への期待と題して会員集会が開催された。上浪大会実行委員長を中心に大会開催の意義やプログラム等がさまざまな視点から語られ、大会への関心をより深める機会となった。

全員集会の様子

フィンランド・スウェーデンの愛されている自然と建築たち

高安重一

今年のゴールデンウィーク(5/2～5/9)を利用して、フィンランドとスウェーデンの建築を見てきました。これは「A.アアルトとG.アスプルンドの建築を巡る旅」という建築ツアーを利用したもので、私にとっては初めての北欧体験でした。

事務所開設当時の仕事

ツアーのタイトルにあるように、今回はアアルトとアスプルンドを中心に見て回るのですが、その中にはフィンランドのタンペレにある「カレヴァの教会」(設計:ピィエテラ)が含まれていたことも、この建築ツアーに参加した理由です。

実は1995年に事務所を始めるきっかけとしてチャペルの設計依頼がありました。その時にいろいろなチャペルを調べていた中で、「カレヴァの教会」に大きな影響を受けた経緯があったので、その建築を見に行くことは開業以来の目標でもありました。(写真1)

この「カレヴァの教会」はコンペで選ばれたとのことで、コンペ向きの考え方が強く表れているように思えます。平面的には三日月型をした壁柱が何枚も立てられて領域を作りだし、さらにイスの断面も独特の断面を引き延ばした構造です。

当時の私の考えていたチャペルは、この断面を引き延ばしたような作り方に影響を受けて、壁柱の平面形状を数種類に絞り込んで、いかに多様性を得られるか？そしてこれをプレキャストコンクリートで作りたいというものでした。結局この仕事は実現せずに終わりましたが、私にとって一番最初の仕事でしたので、大変印象に残っているのがこの「カレヴァの教会」だったのです。

写真１　三日月平面の壁を林立させた、カレヴァの教会

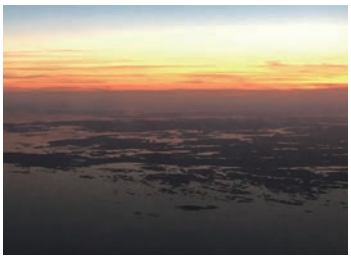


写真２
水と陸の入り交じった
ストックホルムの夕景

写真３　スウェーデン側の水と陸地の風景

水と森の融合

さて、このツアーはまずフィンランドから入るのですが、飛行機の関係で北極圏を通過して、一度フィンランド上空も通り過ぎてドイツのミュンヘン乗り換えなのです。直行便と比べれば7、8時間は余計にかかるので、「いまフィンランド上空なのに…」と思うとモヤモヤとしたものを感じましたが、ミュンヘンからストックホルムへ向かう機内から素晴らしい光景を見ることができました。(写真2)

これを見ると、北欧といえば「水と森の国」というイメージがありましたが、どちらが「図」でどちらが「地」か、判別できないほど入り組んだ地形は、自然の恵みのどちらも大切にするという、この地域のライフスタイルに確実に影響を及ぼしていると思われました。

ちなみに、フィンランドからスウェーデンへの移動は船で1泊かけてゆっくりと移動する行程でしたが、この船上からもこの「図と地」の世界を堪能することができるので、オススメの移動手段です。(写真3)

太陽にあたる喜び

私達がストックホルムに到着したときの気温は夜が

写真４　ヘルシンキ現代美術館からミュージックセンターにかけての広場の使われ方

写真５　フィンランディア・ホールと周辺の人たち

5℃ぐらいですが、日中は23℃程度まで上がりました。その前の週は雪だったとのことで、現地の人にしてみれば「冬から春を通り越して夏が来た！」という状況だったようです。この喜びは私達にはピンときませんが、木々の芽吹きはすさまじく、日光を求める街の人の行動は写真を見てみるとよくわかります。(写真4、5)

ヘルシンキでの一例です。ヘルシンキの中心部にはトーロ湾という美しい水辺が入り込んで、その周辺には公共建築が目白押しです。そこのS.ホールの「ヘルシンキ現代美術館（キアズマ）」からLPR設計事務所（音響：永田音響設計）の「ミュージックセンター」にかけての広場は隙間なく人々が時間を過ごしています。さらにその先に進むと、アアルトの「フィンランディア・ホール」に出くわしますが、ここではハッキリと日陰を避けて日なたに人が出てきている様子がわかります。

これはストックホルムに着いても同じで、ストックホルム図書館の周辺でも、木陰に入ることを嫌うかのように日なたを選んでくつろいでいました。(写真6)

ヘルシンキとストックホルムの違い

太陽を求める人々の欲求の強さは両方とも同じぐらいでしたが、同じ首都であるヘルシンキとストックホルムと言っても、ずいぶんと様子が違いました。一言で言えば「ヘルシンキの健全さ、ストックホルムの古都ぶり」を強く感じました。ヘルシンキは自転車で活動する人も多く、ストックホルムは車。片方はコンビニもほとんど無く、片方は世界のブランドも集まっているが移民や浮

写真６　ストックホルム図書館と周辺の人たち

浪者も多いという印象です。

いまでも使い続けられていること

そして私が今回見学した建築は近・現代の建築で25件ほどでした。もちろんここで全部をお伝えすることはできませんが、全て現在でも使われている建築です。90年近く経つアスプルンドの「森の礼拝堂・墓地・火葬場」はそのままの用途でいまでも使い続けられ、周辺の木々も植え替えられながらベストの状態を保っているとのこと。同じく築90年近い「ストックホルム市庁舎」（エストベリ）や「ストックホルム図書館」（アスプルンド）は現在の私達のライフスタイルを許容しながら、いまでもその機能を保っていました。

その使われ方だけでも羨ましいと思いながら見学していましたが、ストックホルム市庁舎ではガイドの説明を聞いてさらに愛されている理由が分かりました。(写真7)

ストックホルム市庁舎ではノーベル賞の記念晩餐会が行われるなど、ここにノーベルの彫刻があるのは当然かもしれません。ところが他にもたくさんの顔がかかっていたのです。そしてこれが建設に携わった職人達とのこと！ストックホルム市庁舎といえば、青の間、黄金の間など次々と展開される豪華な空間に圧倒されますが、それらを作った職人が常に空間の一部にいるのです。市庁舎と名前がついていますが、行政的な仕事はここでは行われていません。市民のためのホールという思想は最初から刻み込まれており、それが染みこんでいることが大変印象に残りました。

写真７　ストックホルム市庁舎にあるノーベル彫刻と建設職人の彫刻

池田 修氏に聞く

アーティストが街に1人住めば…

歴史的建造物や産業遺構などを文化芸術に活用し、都心部再生の起点にしていこうという、横浜市が推進するクリエイティブシティプロジェクトのひとつ、BankART1929。旧日本郵船倉庫を改修したBankART Studio NYKを拠点に、現代美術の作家を育て、クリエイティブシティ実現に向けてさまざまな活動を行う池田修さんにお話をおうかがいしました。（聞き手：Bulletin編集委員）

――BankART1929の名前の由来を教えてください。

Bank＋ARTです。最初に活動の拠点としていた旧第一銀行、旧富士銀行のふたつの銀行だった建物を文化芸術活動の場にという意味を込めた造語です。1929年はこのふたつの建物がともに竣工された年であり、世界恐慌の中、ニューヨーク近代美術館が設立された年でもあります。現在は紆余曲折あり、元港湾倉庫の建物を運営しています。

――どうして横浜で活動することを選んだのですか。

僕が選んだというより、選ばれたと思っています。じつは名古屋の港湾地区に大きな倉庫が残っていて、そこを将来的にアートスペースとして、どのように運営できるか案を作っていたのですが、実現には至りませんでした。たまたま同時期の2003年末にこの場所をどう活用するか、横浜市の運営者公募コンペがあり、名古屋で考えていたことをベースにした案が通り、2004年3月に事業がスタートしました。

――BankART1929の活動を教えてください。

横浜市はクリエイティブシティの実現に向けて、4つのプロジェクト（ナショナルアートパーク構想・創造界隈の形成・映像文化都市・横浜トリエンナーレ）を推進していましたが、この中で、「創造界隈の形成」が私達に与えられた最も大きな使命だと捉えています。

具体的には、カフェ＆パブ、ショップ、スクールなどのベースになる事業を重要視しながら、展示等の主催およびコーディネート事業で年間約350本に及ぶ事業運営を行っています。

横浜の都市の歴史や経験を引き継いで、歴史的建造物や港湾都市的なロケーションを生かしながら活動を行ってきました。この場所を文化芸術を発信する場にするとともに、街と協働し、食に代表される生活文化、都市、祭り等の多様なジャンルの人々と交わり、市民や専門家、国内外からの提案を幅広く受け入れ、この施設を開かれたものにしてきました。

――最近BankARTでは韓国を多く取り上げています。

BankARTはアジアから見ると、アートについて経済も含めてきちんとやろうとしている実験事業なので、国内外の行政視察は年間200を越え、海外からの視察も非常に多くあります。

その中で特に韓国は芸術部門に力を入れていて、全国各都市から視察に来ていたのです。それに対して何かできないかと思っていたところ、たまたま朝鮮通信使のことを知り、まず2010年に日朝関係の歴史家である仲尾宏さんにBankART Schoolで8回授業をお願いし、さらにBankARTの日韓の都市や施設のネットワークとリンクさせて「続・朝鮮通信使」を実施しました。日本―韓国間を何度も行き来する中で、日本の都市同士さらに韓国の都市が繋がり、だんだん膨らんできました。

台北についても台北と横浜の作家を3か月ずつ滞在して制作するという交換レジデンスプログラムが12年続いています。そうした活動の中で、歴史的に横浜と台湾との深い繋がりを知ることができ、その大きな流れの中で現在活動していることを感じています。

――ひとつ突き詰めると、広がりますね。

「ひとつ突き詰める」ことは僕たちのキーワードです。もともとのBankARTの活動テーマに「国内外のネットワークの構築」がありますが、国内外＝世界中となるとあまりに広すぎます。だからまずは、「続・朝鮮通信使」で韓国と国内と地方都市とのネットワークの構築、都市

BankART Studio NYKで行われた「Expand BankART 川俣正展」（2013年）

としては台北、欧州ではベルリンだけに絞りました。何かひとつを突破した方が、結果的にそこを起点に全体性をもつことができるので、そのようなやり方をしています。

――多くの人に現代美術に興味をもってほしいですか。

それはないです。「ひとりでも多くの人に」という考え方には時間軸が入っていませんね。千年や1万年という時間軸に耐えられないものは美術とは言えません。もちろん人が入らなくてもいいとは思いませんが、人数が来て成功だというあり方に僕はまったく興味がありません。その時に受けたとしても残るものはほとんどないことを歴史が証明しています。いま受けなくても、自分たちがいいと思ったものはやらなくてはならない。BankARTはそういうチームです。

ただ、自らの企画も強く打ち出しますが、市民やアーティストなどのオファーを可能な限り受け入れ、コーディネートすることに最大の力点を置いてきていることも事実です。

――横浜には至る所にアートがあり活性化しています。

前市長の中田宏さんの当時参与だった元横浜市都市デザイン室長北沢猛さんが大きく推進したことは確かです。

北沢さんは、都市から切り離したアートではなく、街の建物、歴史、交通や人のとの関係のなかでアートの役割をとらえようとしていたかと思います。彼はアートのもつテンポラリーだけどインパクトのある瞬発力と都市の継続的な開発がリンクできると歴史的に理解していて、それを横浜で実践したかったのだと思います。だから横浜のまちづくりの試金石となるプログラムとしてトリエンナーレや創造都市を位置づけました。ところが現在は、残念ながら狭い解釈のアートプログラムになり始めています。

――現在日本の都市に足りないものは何でしょうか。

現代美術のアーカイブはこの30年分ありません。現代美術の展覧会数は確かに増えてはいますが、常に接することができるパーマネントコレクションになってはじめて本物ではないでしょうか。

海外では、大きな倉庫などをリノベーション（転用）してアートスペースにしている施設が多いです。日本でもそれをやらなければならない時期に入っていて、そこで手を挙げるべきなのが横浜市だと思います。トリエンナーレ、倉庫群、土地が安くて広い……それに海運の面もあります。自分がBankARTを運営するとともに新しいものにトライする重い腰をどうやったら上げられるか。

「続・朝鮮通信使」横浜パレード（2014年）

そちらに力を入れないといけないと思っています。

――建築家に向けてメッセージはありますか。

アートは、時代を先取っているというか常に予感を示してきました。そこを見ていてほしいです。単純に計画やデザインの参考として見るのか、それともリスペクトすべき存在として見るのか、それでアートに対する接し方が変わってきますし、空間の性質や街全体の見え方が変わってくると思います。

日常や建築の計画や経済構造の中で滑り落ちていくさまざまな「とらえがたい」ものを、アートは常にテーマにし、格闘し続けています。アートを腫れ物、わからないもの、変人だとして遠ざけるのではなく、アーティストが表現している世界に正面からつきあってもらえるといいなと思います。

インタビュー：平成28年7月7日　BankART Studio NYKにて

聞き手：浦 絵美・八田雅章・長澤 徹

PROFILE

池田　修（いけだ おさむ）

BankART1929代表・PHスタジオ代表

1957年大阪生まれ。Bゼミスクール卒業後、都市に棲むことをテーマに美術と建築を横断するチームPHスタジオを発足。展覧会や美術プロジェクト、建築設計等、多岐にわたる活動を行っている。代表作は広島のダム湖に沈む町でのプロジェクト「船、山にのぼる」。また、代官山ヒルサイドギャラリーディレクター（1986～1991）等、コーディネーターとしての実践も長い。1994年から名古屋芸術大学（院）非常勤講師の他、他大学、他都市での講演も多い。2004年からBankARTの立ち上げと企画運営に携わり、今日に至る。編著にはBankARTの数多くの刊行物の編集を手がける他、「PHスタジオ1984-2002」等がある。2009年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2011年度、横浜文化賞文化・芸術奨励賞、2013年度、国際交流基金「地球市民賞」を受賞。

見る、描く、考える

旅で学ぶということ

香山壽夫

若い時の旅で得たものは、かけがえのない貴重なものだ。年を重ねる毎に、その思いを深くする。単になつかしい想い出、ということではない。設計に取り組んでいて、何か大切な根本的な問題と向きあうような時、自分の心の底から沸き上がってきて、自分を支えてくれるものは、この若い時に得た、建築についての初源的な感覚である。何が良い建築なのか。何が美しいのか。たとえ世の中がもてはやしていたとして、このことはやっていいことか、やるべきでないのか。そうした判断は、理屈や計算からは出てこない。自分の心の底に問うしかない。その根底を作る大切なもののひとつが、若い時の旅だ。真剣で、夢中で、見て考えて歩いた若い時の旅だ。

ヨーロッパの建築を訪れる長い放浪の旅に出たのは、私の二十代の終わりの時だ。アメリカの大学での勉強と実務修行の数年の後、どうしてもヨーロッパの建築を見ずにはいられなくなった。まだ外貨も、海外旅行も自由化されなかった時代のことである。

冬の大西洋を安い貨物船に乗って越え、ロンドンでしばらく働いたが、この時にはイギリスにあまり馴染めなかった。なまじアメリカと言葉が同じで、文化伝統に共通性が多いだけに、かえって違いが気に障った。今はそうではなく、むしろその違いが楽しいのだが、そのときは私も未熟だった、ということなのだろう。それはそれとして、この間に、しっかりした旅の準備ができた。何を見るか、どう見て回るか、1896年に出版された、バニスター・フレッチャーの『比較法による建築史』がその最良の案内役であった。

暗い湿った冬が終わるや、放浪への思い押さえ難く、まずイタリアのミラノに行って、フィアットの小さな車を買い、何時何処で旅を終えるか、全くあてのない、ただ見たい建築を見て回るだけの旅が始まった。

始めは北に上がってスコットランドで夏を過ごし、そこからゆっくりと南へ下がって、ドーバーを渡り、フランス、スイス、オーストリアからアルプスを越え、ユーゴスラヴィアを経てギリシャに達した。それから先は、ここからトルコに渡り、エジプトから北アフリカを通ってスペインへ行こうかとも考えていたのだが、第一次中東戦争が始まったので、それは諦め、ギリシャからアドリア海を渡ってイタリア半島の先端に戻った。

見たい建物のあるところまで来ると、近くの公園や森のキャンプ場にテントを張った。食べものは村や町の市場で求め、アメリカ以来、旅には常に持ち歩いているキャンプ用ストーブで料理した。満足できるまで建築を見、スケッチし、思ったことをノートに記しながら留まった。仕事から離れ、身分も所属もなく、全くの放浪無頼の旅だった。

一枚の写真を撮るために、良い光を待って何日も留まったときもあった。貧しかった私にとって、フィルムは高価なもので、それを格安で購入するために、ロンドンのコダック社で苦労したのであった。従って、建築毎に使えるカット数は「フレッチャー」に相談しつつ、あらかじめ決めてあったのである。このように、苦労し、熟慮しつつ撮った写真は、今日見ても出来が良い。

イタリアから再びパリに戻ったときは、もう初冬だった。マロニエの葉も散ってパリは寂しく暗い季節に入っていた。旅の途中で、お腹の大きくなったつれあいを日本に帰し、しばらくノルマンディの修道院に寄宿させてもらった後、パリの大学地区の安宿で、旅の間考えていたことをノートにまとめた。思い直し、考え直しては、自分を問い直した。これが私の二十代の終わり、今日に至るその後の始まりであった。

ローマの廃墟（コンテ・スケッチ）1967年

2015年度
大学院修士設計展の報告

展覧会：2016年3月10日～12日
会　場：芝浦工業大学芝浦キャンパス8階

大学院修士設計展
実行委員長
佐藤光彦

「大学院修士設計展」は、2015年度で14回目を迎えることができました。

従来この企画は、関東甲信越地区の大学院より優秀な修士設計作品を推薦していただき（2点まで）WEB上に掲載するというものでしたが、前任の石田敏明実行委員長の代の第11回より、WEB展も継続しながら、修士設計のパネルと模型を実際に展示する展覧会を開催するという大きな改革が行われました。さらに建築家の単独審査による審査・講評を行い、優秀な学生と作品を顕彰することとなりました。

これまで槇文彦氏、伊東豊雄氏、坂本一成氏を審査員に迎え、今回は富永譲氏にお願いしました。これに加えて、各大学で修士設計を指導されている教員によるシンポジウムも2回開催しています。第12回からは、参加作品および審査、講評、シンポジウム内容、各大学の研究室紹介を収めた作品集を、総合資格学院の協賛を得て刊行しています。このように、本展覧会はここ数年で大きな変貌を遂げ、参加校も増加傾向にあり、関東甲信越地区で修士設計を行っている大学のほぼすべてから出展していただくところまできています。

他の修士設計展と異なるのは、出展作品は自薦ではなく各大学からの推薦であり、さらに大学院で修士設計の指導を行っている委員が主体となって運営しているところです。大学から推薦されることにより、各大学が修士設計をどのように指導しているかを見ることもできます。

卒業設計とは異なり、修士設計にはリサーチに基づいた研究とそこから導き出される仮説の立案およびその検証、デザインの言語化などが求められますが、大学によって温度差はあります。かつて、大学院に修士設計というものはありませんでした。未だに論文のみという大学もあります。修士設計を論文に匹敵する修了要件としてどのように位置づけ評価するか、各大学で試行錯誤した時期もあります。それ故、何をもって修士設計足るのかという問いに戸惑う学生たちも多いように思います。

この展覧会では、「修士設計」のあり方を問い続け、これに立ち向かう学生たちの道しるべになることを意図して運営していくつもりです。

次年度も、これまで以上に事前周知を充分に行い、本展覧会が学生、大学教員、建築関係者、市民を結びつける活動に発展することで、大学院教育に少しでも寄与できればと考えています。会場設営に当たった実行委員および学生たち、会場を提供していただいた芝浦工業大学、協賛いただいた㈱総合資格のみなさまほか、関係者の協力にはこの場を借りて御礼申し上げます。

●2015年度 大学院修士設計展 概要
展覧会：2016年3月10日～12日
審査会：2016年3月11日
審査員：富永譲（建築家、法政大学名誉教授）
出展数：参加大学27専攻　全46作品
Web展：http://www.jia-kanto.org/shushiten/

審査会

展示会場

アーバントリップ実行委員会

第80回アーバントリップ見学会に参加して

コーディネーター
尾形光男

今回の見学会の案内に、「一つは昭和30年に竣工、その後増築を重ね、平成25年に改修を行った住宅。もう一つは昭和51年に竣工し、一部改修して使われ続けている住宅を体感するプログラムです。いずれも誰もが知っている名建築住宅です」とありました。個人住宅はなかなか見る機会も少なく、名建築の貴重な見学会になりました。

見学会は、後楽園駅のそばの礫川（れきせん）公園から始まりました。公園からしばらく歩くと最初の住宅はありました。

■小石川の住宅（「私たちの住宅」）

この住宅は、かつて林昌二、林雅子夫妻の住宅だったものを安田幸一さんが引き継ぎ、改修して住まい続けています。

早速、住宅内に入ると安田さん夫妻が出迎えてくれました。玄関から入ると、居間から庭に開放された空間があらわれ、最初にこの居間で住宅についての説明がありました。

この住宅が1階建ての小さな住宅から、増築などを重ねて長い時間をかけて今の姿になったことをはじめて知りました。そして、安田さんが「骨格」は変えずに、「設備」と「設え」の更新を行って、住まうことになったとのことです。

説明後、内部の見学がありました。まずはこの居間の左側にある三角形平面の暖炉のあるダイニングキッチン。ここがかつて、2人のふだんの生活の場であったことが想像できました。そして、この2つの空間をつなぐ水回り空間。特にウォークスルートイレとも言ったら良いのか、ちょっと目からうろこでした。2階はかつての家主の休日の生活の場所とのことです。忙しい仕事のことを忘れる空間だったのでしょう。1階と2階の空間を仕切る水平間仕切りまで用意している、念の入れようです。まさに、生活の形がそのまま住宅の形となっている、1階は平日の場、2階は休日の場という特別解の住宅でした。また、家主がかわっても、住み続けていることが重要なのだと感じました。

私の大学時代の教授もたくさんの初期モダン住宅を設計しましたが、鉄骨だったこともあるのか現在ほとんど残っていません。さまざまな理由から解体せざる得ないことは仕方のないことですが、このような住まい続ける方法がもっと一般的にならないかと、少し考えさせられる見学でした。

■上原通りの住宅

2つ目の見学先は篠原一男設計の、ある写真家の住宅です。代々木上原駅から商店街を通り、路地を曲がると、そこに建築雑誌で見たことのある住宅が存在していました。Y字型の柱と、2階のキャンチレバー、その上に載せられた半円形の頂部で構成された住宅が、そこにはありました。

篠原さんの建築は書籍では見たことがありましたが、実際に見たことのあるものは東京工業大学百年記念館ぐらいの私にとって、住宅街に佇むこの住宅には驚きを感じました。写真で見たことのあるイメージとまったく違う、ヒューマンスケールなかわいらしい住宅がそこにはありました。

東京工業大学の奥山信一先生にこの住宅の前で一通りの説明をしていただき、内部見学がありました。1階のピロティー空間から階段を上ると2階にこの住宅の玄関があります。見上げると斜めのガラス仕切りがあり、外部と内部を仕切っています。また、この玄関の木製扉がY字柱により頂部が斜めに切り取られた形となっていました。Y字形がいろいろと仕掛けてきます。内部に入ると、中央のY字柱が我々を迎えてくれました。このどう見ても邪魔な存在のY字柱が2階の空間を形成しています。また、内部の合板仕上げの壁はコンクリート型枠をそのまま利用しているとのこと。またしても、目からうろこが…。3階はヴォールトの天井の部屋です。すでに折板天井はボード貼りとなっていましたが、2つの丸窓がある空間がありました。

見学の後、この家の奥様とお話しさせていただきましたが、この住宅を理解し、大切にしていることがすごく伝わってきました。おそらく、中央のY字柱も家主たちによってうまく使われているのだと思います。それが、この家の居心地の良さにもつながっているのだろうと感じました。当初は1階は仕事の場、2階は生活の場、3階は子供の場だったそうですが、今は違う使い方をしているそうです。これからも大切に、この住宅は使われ続けていくのだと思います。

この2つの名建築を見て、建築の力、空間の力を改めて再認識させられました。特に設計している建築家と、使っている家主が理解し合って、使い続けることの大切さを感じた見学会でもありました。

アーバントリップ実行委員会

第81回「新緑の軽井沢へ」変わる軽井沢、変わらない軽井沢

建築ジャーナル
西川直子

軽井沢と聞くと、冷静ではいられない。6月13日「新緑の軽井沢へ〜自然の中にたたずみ、自然を楽しむ名建築を巡る〜」との誘いにひかれ、第81回アーバントリップ見学会に参加した。訪ねたのは2つの別荘、建設会社支店、私立美術館の計4ヵ所。

軽井沢町長倉にある「北澤アトリエ」は1962年竣工のレーモンドが夏の仕事場として使っていた「軽井沢新アトリエ(軽井沢スタジオ)」。現所有者の北澤興一さんは、1961年から71年の間、レーモンドの事務所に勤務。毎年レーモンドは7月の第1金曜日から9月の第1金曜日まで、設計スタッフ3人をともない軽井沢で過ごした。北澤さんは、在籍中現場常駐時を除きこの軽井沢スタッフに選ばれ、誇らしかった。1972年にレーモンドがアメリカに去る際、この別荘を「月5万円の給料なのに3100万円で買い取った」そうだ。後日、レーモンド事務所はアルバイト自由で、独立資金として貯めていたものをあてたと聞いた。「葉山の海の家は、壊さないとの約束で売られて3ヵ月で解体された。1933年竣工のレーモンド旧夏の家は、塩沢湖畔に移築されて現在「ペイネ美術館」になっているが、南北逆で周辺環境までは再現されていない」と北澤さん。「軽井沢に別荘を構えた文学者や美術家などの資料が散逸の危機にある。軽井沢町は、収集、公開に努めるべき」と訴える。近年、茅葺き屋根が維持できず、茅を下ろしてしまったが、内部は50年前のまま。できるだけ維持し、求められれば見学者も迎え入れたいと言う。

南ヶ丘のY邸は、坂倉建築研究所の設計。会長の坂倉竹之助氏と若いスタッフ2人が担当した。その1人吉田智重氏の案内で見せてもらった。昨年9月に完成したばかりの個人宅であるにもかかわらず、大勢の見学者を受け入れてもらったことに感謝したい。アーバントリップ委員会の尽力に加え、設計事務所とクライアントの信頼関係があったからこそだ。

Y邸設計に当たっては、「非日常性と浮遊感を大事にした」という。かなりの費用を掛けたと思われる。軽井沢に別荘を持つ意味が何か大きく変わってきていると感じた。

旧軽井沢の「北野建設軽井沢支店」は、長野で名高い建設会社の社屋。1978年、吉村順三設計事務所の設計で吉村順三70歳の時。多くの部分を故・大野寛氏が設計していたらしいが、3段の段差や天井高の違いで空間をかたちづくっていく手法はレーモンド軽井沢スタジオと共通点が見出せて興味深い。

レーモンドアトリエに近い長倉の西沢立衛氏設計の「軽井沢千住博美術館」。西沢立衛建築設計事務所の松井元靖氏が案内・解説してくれた。コンクリートの床がうねるように傾斜しており、上から見てところどころ穴が開いていて、植物が植わっている。森の中を歩くようにして見る美術館なのだ。大手会社の会長が、滝の絵で知られる日本画家千住博氏作品のコレクターで、財団法人立の美術館をつくることになった。西沢立衛氏は、千住博氏の紹介らしい。個人が個人の美術館をつくる。作家が一人だけの美術館だからこそできた空間だ。

ただ、重要な要素を占める植物だが、軽井沢をテーマとした詩や文学に登場するものとは異なり、オーストラリアの植物を使うなど、現代的なガーデニングとなっている。50年、100年経ってはじめてこれも軽井沢の風景になるのか、そのときこの建築は存在するのか、そんなことを思った。

軽井沢の変わらないもの、変わるもの。考えさせられる見学会だった。梅雨時、人が多くなる前一瞬の季節をねらった好企画を賞賛したい。来年もこの季節に建築を見に行こう。

旧レーモンド軽井沢新アトリエ、外観と暖炉のある内部

総務委員会

会員相談室

ベテラン会員による「会員相談室」（第２回目）を行います!!

昨今、建築家を取り巻く環境が益々厳しくなる中、日頃身近な相談相手を得る機会の少ない若手および中堅会員を支援する仕組みとして、今年度よりベテラン会員による「会員相談室」の試行を開始しました。

この度、ご好評にお応えしてその第2回目を行います。今回からは新たに「テクニカルレビュー」もメニューに加え、経験豊富な先輩会員が親身に対応して下さいます。この機会をぜひご活用下さい。

対　　象	関東甲信越支部所属のJIA正会員およびジュニア会員（本人に限ります）。
期　　間	2016年9月5日㈪から9月30日㈮まで。
対応内容	設計監理の技術アドバイス、業務上のトラブル対応、事務所運営等に関する悩み相談、設計図面のテクニカルレビュー（基本設計または実施設計段階での技術的なアドバイス）。
費　　用	無料です。

詳細および申し込み方法は『Bulletin』本号に同封の案内チラシまたはJIA関東甲信越支部HP（JIA News）をご覧ください。

相談員

大井清嗣
トラブル回避のマネジメントアドバイス、訴訟支援

渡辺　純
大型プロジェクトから住宅などの小プロジェクトまで

夏目勝也
保存再生プロジェクト、高齢者福祉施設コンサルタント

坂田　泉
アフリカにおける住環境技術によるプロジェクト実績

島田喜男
中小規模建築の実績、東京地裁民事調停員

三栖邦博
設計事務所の経営、管理、デザイン・技術戦略

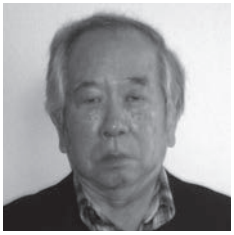
山本富士雄
木造建築、現代数寄屋

竹下衛司

中村弘道
小さなものから都市的なスケールまで

長谷山純
ホテル・旅館等のデューデリジェンス実績

齊藤智美
総合計画的マネージメント



新開富壽
民間レジャー施設・集合住宅、施工方法

栗谷和彦
住宅・店舗から医療・教育施設、地域計画

平田昭久　外資関連プロジェクト、大型物件で多くの実績
五味道雄
庄司和彦　プロポ・コンペの進め方、医療福祉・教育・文化施設
淺石　優
倉田直道　まちづくりや都市デザイン、景観審議会委員
岡野正人　海外プロジェクト
彦坂　裕　万博施設等の統合プロジェクト、新たなヴィジョン構築
中田準一　調査・企画から基本・実施設計・監理・保全等まで
藤森正純　大規模複合開発・再開発・超高層住宅、スポーツ施設

交流委員会

交流委員会Aグループ 見学会報告

法人協力Aグループ
日本ヒューム株式会社
東京支社
香川幸仁

2016年5月10日、浅草にて見学会を開催し、総勢15名で2時間ほど見学しました。平屋の建物を積み重ねたようなデザインが特徴的な浅草文化観光センターの前の雷門で集合し、台東区公認ボランティアガイドの高橋様、大貫様に浅草寺境内と周辺の案内をしていただきました。

●見学コース
浅草雷門→仲見世通り→浅草公会堂（スターの手型）→伝法院→宝蔵門→本堂→浅草神社→五重塔

雷門は、1000年以上前に建てられ幾度かの火災による焼失でさまざまな形式の門になり、現在の姿に至っています。仲見世通りは多くの観光客で賑わっており、人混みを避けるため、仲見世の裏通りを歩きながら見学しました。仲見世は、約300年前からある日本で最も古い商店街の一つであり、明治に入って赤れんが造りに改築されます。関東大震災により壊滅しますが、その後、現在の姿のもととなる鉄筋コンクリート造の朱塗りの商店街になりました。雷門と宝蔵門の間（仲）にある店（見世）であることが、その名の由来となっています。

本堂へ向かう前に、浅草公会堂前のスターの広場へ立ち寄りました。ここには、芸能振興に貢献した著名人の手型とサインが刻印されたプレートが多数あります。伝法院通りから本堂方向へ向かう通りには、火の見櫓や鐘など所々に江戸の町並が再現されていました。昨日まで庭園を公開していたという伝法院を外から眺めながら、伝法院の歴史を聞き、浅草寺本堂へと向かいました。途中で浅草寺の起源など描いた日本画があり、ここで浅草寺の起源を説明していただきました。

本堂前には宝蔵門があり、昔は仁王門と呼ばれていた通り、門の左右には仁王像が安置されています。宝蔵門もその名のごとく、文化財が収蔵されているとのことでした。

宝蔵門を抜け本堂に入ると、天井の左右に天人、中央に龍の大きな絵が描かれています。見上げた感じはとても迫力があります。本堂にて参拝し、少し中を見学させていただきました。

浅草神社には、浅草寺のご本尊として土師中知（はじのなかとも）、檜前（ひのくまの）浜成・竹成兄弟の3人が祀られており、平安～鎌倉時代に子孫が先祖を神として祀ったともいわれています。権現造りの社殿は、3代将軍徳川家光の寄進で、重要文化財となっています。この週に行われた三社祭は浅草神社の例大祭で、大変賑わったとのことでした。

五重塔は、942年に建てられ、2度の火災と昭和20年の戦火で倒壊しましたが、昭和48年に再建されました。SRC造地上53.32mで、京都の東寺の五重塔に次いで日本で2番目に高いということでした。

1時間半の予定でしたが、ガイドの方の興味深いお話に夢中になり、30分超過した2時間の見学会となりました。この日は、雨天の予報でしたが見学中は雨も降らず、有意義な見学会となりました。見学会後の懇親会も浅草の話題で大いに盛り上がりました。最後に、ここでしか聞けない話もたくさんしていただき、長い時間快くガイドを引き受けていただいた高橋様、大貫様に感謝を申し上げます。

浅草（文化観光センター・雷門・宝蔵門）

浅草（浅草神社）にて

山梨地域会

山梨地域会の活動 見学会と講演会

山梨地域会
渡辺安徳

平成27年7月11日㈯に山梨地域会主催の見学会と講演会を開催しました。

午前に地域会会員の設計、監理JVによる耐震・復元改修工事が完了した山梨県指定文化財の山梨県庁別館の見学会を行いました。昭和5年に完成したアールデコ様式の庁舎です。

当初、40人2班構成で募集しましたが希望者が多く、60人3班で実施しました。説明者はJV事務所より2名と施工者から1名にお願いしました。参加者は20代から70代と幅広い年齢層で県内各地から、また東京、静岡、長野など県外からの参加者も多く、建築関係以外の一般の参加者が40人以上になりました。建設当時の資料が少なく復元に苦労したこと、床を剥がしたら土間に描かれた当時の原寸図が出てきてそれを参考に施工したこと、既存の意匠を崩さないよう構造補強を行わなければならないこと等、貴重な話を聞くことができました。

装飾という言葉を最近あまり耳にしません。機能は時代によって変化します。機械は古くなれば壊れますが美しい装飾は人々に愛され、心に残り保存されます。現代建築が40～50年で解体される今日、様式建築の持つ力を感じました。

午後に、建築史家で建築家としても活躍中の藤森照信先生をお招きして講演会を同一敷地内にある、やまなしプラザ、オープンスクエアで行いました。わかりやすく、たくさんの著作のある藤森先生の人気と、午前の見学会からひき続きの参加者で、用意した170席が総て埋まりました。

テーマは「山梨の近代建築」でした。明治の中頃土木、建築好きの山梨県の県令（当時の知事職）藤村紫朗が普及させた疑洋風の藤村式建築の説明がありました。山梨県に小学校等がたくさん建設され、今日でもいくつか保存されています。しかし藤村が山梨を離れた後その活躍はばったりと途絶え、歴史から忽然と消えたそうです。藤森先生曰く「山梨で燃え尽きた」。ほとんどの藤村式建築が山梨県に集中し他ではあまり見られない理由がわかりました。

話が古今東西の建物におよび、その歴史の流れの中で先生ご自身の作品の解説をされました。「過去の様式に精通している建築史家だからそれらをデザインソースにはしたくない」、「インターナショナルなバナキュラー」等、興味深い話をされました。自身の言葉で第三者にしっかりと説明できることの大切さを感じました。講演後の質問も多くの方がされ、盛況の内に終了しました。

午前の様式建築の見学会、午後の藤森照信先生の講演会と、歴史の大切さ、面白さを感じた1日でした。甲府盆地特有の蒸し暑い日でしたが、参加していただいた方々には心より感謝します。

見学会の様子

藤森照信先生の講演

長野地域会

長野地域会活動報告

長野地域会
代表
山口康憲

長野地域会では、今年度から2年をかけて組織改革と、将来のあるべき事業の姿を模索しながら、今まで行ってきた事業の取捨選択と、さらに我々の資質の向上と地域貢献につながる新しい事業の展開を行っていきます。

■信州“準寒冷地温熱教室2016”連続セミナー開催中

長野県では本年4月より、300m²以下の住宅でも一次エネルギー計算書を提出することが義務づけられ、ひと足先に平成25年省エネルギー基準を満たした家づくりが進んでいます。準寒冷地の長野県においては、きちんとした温熱環境技術を活かすことによって、温暖地に比較しても体感的な気持ちよい住まいづくりを目指すべきであると考えます。

6月～11月まで毎月1回全6回のセミナーですが、この分野では現在注目されている辻充孝（みつたか）先生（岐阜県立森林文化アカデミー准教授）をお招きし、広く非会員にも呼び掛け、県外からも含めて75名の参加者を得ました。

今回のセミナーを通して我々JIA会員のみならず多くの方に参加をしていただき、総合的な住まいの温熱設計技術を身に付け、地域の文化や伝統・風土を生かした信州らしい生活空間の提案と普及を目指しています。

■夏のセミナー

7月30日㈯に恒例の夏のセミナーを開催しました。会員28名が参加しての大町市でのまちなみウォッチング。日本海の糸魚川から松本方面へ塩を運んだ千国街道（塩の道）周辺の普段は公開していないところも含めた歴史的な建物を、半日かけて地元の建築家（JIAに強制的に入会予定）の案内で見学しました。その後は大町温泉郷に移動し、信州大学の高村先生によるZEH事例集の住宅募集の説明会・熊本地震報告会を行い、夜は納涼会で交流を深めました。

温熱教室の様子

塩の道ちょうじや（旧塩の道博物館）

■JIA長野県クラブの公式サイトをリニューアル公開

JIA長野県クラブの公式サイトを8月1日にリニューアル公開しました。日々楽しい情報がそこにあり、訪問してみたくなる「生きているサイト」へと発展していくことを目指して、社会への情報発信、会員にとっての利便性、会の活動や魅力のアピール、正会員・協力会員の情報などを盛り込んでいます。地域社会に建築家の職能と我々の幅広い活動を理解していただくと共に、志を共にする仲間が増えることを目指しての渾身のHPとなりました。

トップ写真にはJIA会員建築家の設計実例を掲載し、カレンダー機能を導入して地域会の幹事会や各委員会、イベント、会員情報や本部・支部情報を盛り込んでいます。また過去の活動記録としての貴重な資料をストックしています。

今回のホームページリニューアルは、今年度の重点事業と位置付け、広報委員会が取り組みました。ここに公開となりましたが、3年後5年後を見据えての骨格作りの段階と捉えています。これからこのサイトが大きく育っていくことを願っています。みなさんぜひご覧ください。

■JIA長野県クラブ 公式サイト

http://www.jia-nagano.com

目黒区景観計画に基づく「景観アドバイザー会議」の報告

JIA 目黒地域会・顧問
棚橋廣夫

■JIA目黒 第５回「街かどトーク」

JIA目黒地域会の連続講座「街かどトーク」を、去る6月1日、建築家会館1階大ホールにて開催した。今回は青木英二目黒区長をお招きし、「青木区長が語る目黒の街づくり」と題してお話をうかがった。区長からは、①安全安心の街づくり②人口減による区民の区施設の負担増を抑え、施設の複合化による効率化③17％の現緑被率を20％に④建築四団体と防災協定の締結⑤景観アドバイザー会議と景観大賞についてご説明いただき、会場からの質疑応答も行われた。当日は景観アドバイザー制度に係る区担当者も出席され事例の紹介などもあった。また、建築街づくり委員会の連会長（むらじ）より日本版CABEのお話をいただいた。私は昨年より目黒区景観アドバイザー委員に任命されているので、その役割と行政における位置づけを以下に紹介する。

区政を語る青木区長（右）

■目黒区に於ける「景観アドバイザー」の役割と日本版CABEについて

目黒区景観計画に基づく届出の流れを図1に示す。申請対象は区が制定した3つの景観軸特定区域と2つの景観街づくり特定区域に於ける大規模指定建築物（5,000㎡以上）および特定大規模指定建築物（10,000㎡以上）の事前協議である。景観アドバイザーの構成（図2）は3名で実務経験の豊富な専門家が具体的なアドバイスを行っており、CABEのデザイン・レビューに相当する。アドバイザーは会議当日申請現地に赴き、区担当者から内容説明を聞く。事前協議のプレゼンテーションには必ず事業者と設計担当者が出席し、区の説明に続き設計担当者より計画内容の説明が行われる。最後に3名の景観アドバイザーよりそれぞれの問題点や改良点のアドバイスがあり協議が行われる。本来、会議では環境と景観に係る助言が対象であるが事業主の考えを聴くこともあり、また計画内容に立ち入ることもある。特定大規模指定建築物の場合は通常1回の事前協議の義務付けに対して、任意の事前協議を複数回設け、アドバイスを計画段階で反映できるようにしている。また、国や自治体の区内計画にも申請義務はないが極力事前協議への協力を仰ぐ方針であり、CABEのイネーブルに相当する。アドバイスは色彩などの景観基準以外、強制力はないものの設計者から施主に説得しづらい点も第三者のアドバイスとして事業者の耳に届くこともあり、この制度の意義ある点でもある。また、実施に際して景観アドバイザーの意見がどのように反映されたかをトレースし報告を行ってきており、ある程度の成果が生み出されていることが確認されている。

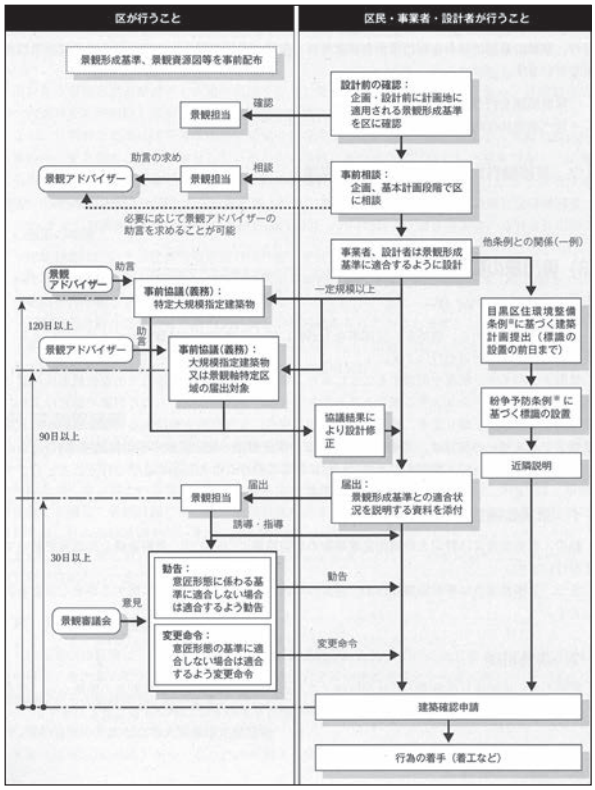


図１　景観計画に基づく届出の流れ

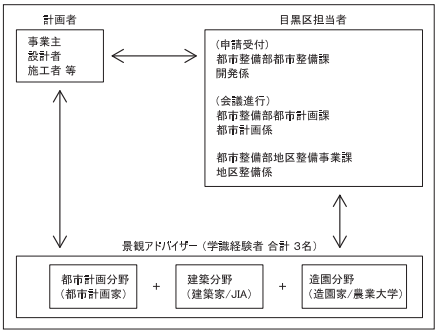


図２　アドバイザー会議の構成

建築は面白い！
まちも面白い！
建築家も面白い！

JIA建築家大会2016大阪
笑都物語
繋いできたもの　繋いでゆくもの
参加登録8月中旬予定

JIA National Convention osaka 2016

支部広報誌『Bulletin』原稿募集

■ 海外レポート（自薦、推薦）

海外レポートは海外で活躍されている方から、その国の建築に関わることについて紹介しています。海外との交流や国際会議、見本市などの参加報告でも結構です。自薦、推薦どちらでも構いません。ぜひ編集部へご連絡ください。

① 文字数　2,500文字程度（2頁）
② 写真、図版　2～3点程度（JPEG形式）
③ 執筆者の顔写真（JPEG形式／白黒での掲載になります）
④ タイトル
⑤ 図版キャプション
⑥ お名前、事務所名、電話番号、E-mail

〈投稿申し込み・お問い合わせ先〉
JIA 関東甲信越支部事務局　大西
E-mail：mohnishi@jia.or.jp
TEL：03-3408-8291　FAX：03-3408-8294

残暑…　編集後記

■「夕涼み、日焼けのあとと惜しみ行くひと夏の思い出。」～と哀愁に浸るどころか、何ざんしょ！この残暑！　（高橋）

■今年は、暑い夏。娘にとっては、初めての夏。仕事の合間に、夏らしいイベントを久し振りに色々と頑張ってみるも、ダイエットできた！とはいかず、この残りに期待中です。　（浦）

■我が家は庭で採れる果物が季節を知らせてくれます。蜜柑、桑、ブルーベリーと季節が過ぎ、柿が少し膨らんできました。　（長澤）

■残暑と聞くと、遠い昔少年誌に載っていたダジャレを必ず思い出します。「残暑です、そうざんしょ！」　（上原）

■ゆっくり休みをとる余裕もなく、オリンピック中継観戦の寝不足でも、好物の冷たい蕎麦と睡眠で残暑を乗り切ります。　（八田）

訂　正　『Bulletin』262号（5月号）「部会活動報告／建築交流部会」（p.21）のなかで、以下の誤りがありました。
写真7　誤）タウトの旧居、小林山洗心亭外観　正）タウトの旧居、少林山洗心亭外観
写真8　誤）小林山洗心亭内観　正）少林山洗心亭内観
訂正してお詫び申し上げます。

編集　：公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長　：高橋隆博
副委員長：八田雅章
委員　：小山将史・長澤　徹・中山　薫・上原和彦・吉田　満
清水裕子・浦　絵美
編集長　：八田雅章
副編集長：長澤　徹
編集ワーキングメンバー：倉島和弥・市村宏文・立石博巳・小山将史
中山　薫・浦　絵美
編集・制作：南風舎

Bulletin 265　2016. 9
発行日：平成28年8月15日
発行人：浅尾 悦子
発行所：公益社団法人 日本建築家協会　関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel：03-3408-8291㈹　Fax：03-3408-8294
印刷：株式会社 協進印刷

■JIA関東甲信越支部関連サイト一覧
・（公社）日本建築家協会（JIA）　http://www.jia.or.jp/
・建築家online（一般向け）　http://www.jia-kanto.org/
・JIA関東甲信越支部（会員向け）　http://www.jia-kanto.org/members/

■ 定価 300円＋税／会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2016

100年クリーン

水のチカラで、ずっと輝く
AQUA CERAMIC

クリーン① トイレの汚れが、ツルンっと落ちる。
クリーン② リング状の黒ずみ、くすみとサヨナラ。
クリーン③ 新品時のツルツルが、100年つづく。※

LIXIL主力住宅トイレのすべてに「アクアセラミック」を展開

※ 同一部位の摩擦回数2往復で年間365日お掃除した場合。お掃除ブラシで約7万回（100年相当）の往復を想定しています。

株式会社 LIXIL　お客さま相談センター　0120-179-400　受付時間：平日 9:00〜18:00　土・日・祝日 9:00〜17:00